



『女子寮』

作者 大黒達也

一・作品紹介

牧野 瞳^{まさの ひとみ}、二十一歳。類まれな容姿を持つ女。

コンピュータデザイナーを目指し、商社を辞めて専門学校に入学する。

瞳は学内にある女子寮に入寮することになる。そこで彼女を待っていたものは……。

二・登場人物

牧野 瞳^{まさの ひとみ}

美貌と極上の肢体を持ち、グラフィックデザイナーを目指す女。コンピュータ専門学校の女子寮で、彼女は陵

辱の限りを受け、最後には……。

早乙女 由梨

瞳に匹敵するほどの美女。同じ女子寮で、彼女も数々の辱めを受ける。最後には……。

上田 明菜

瞳の同室の先輩。寮内で瞳や由梨にレズ売春を強要する。残酷な性格の持ち主。

橘 美保、佐藤 恵美

明菜の仲間達

三・ 目次

「女子寮」

第一章 儀式

第二章 肉奴隸

第三章 地下室

第四章 試食会

第五章 悪魔の宴

四・本編

第一章 儀式

場所は、東北地方に位置するX市の中心街。斬新なデザインの外観をもつコンピュータデザイン専門学校前に、一台のタクシーが止まった。中から、豊かな胸元が覗くタンクトップTシャツに、ミニスカートを穿いた若い女が下りてきた。トランクから大きなスーツケースを取り出し、運転手に軽く挨拶をして、専門学校の正面玄関に入ってしまった。

女は、正面玄関を抜けて、エレベータホールに入り、エレベータを使って校舎の四、五階にある女子寮に向かった。

牧野 瞳。二十一歳。短大卒業後、市内の商社に就職

したが、短大在学中に興味で始めていたコンピュータデザインへの夢が棄てきれずに、会社を一年で止め、専門学校に入学することとなった。

在学中はミスX市に選ばれるほどの美貌の持ち主であり、身長百七十センチと長身で、均整のとれたグラマーな肢体の持ち主であった。

午後八時、瞳は同室の先輩である美保と、夕食を済ませ部屋に戻った。食事前に風呂に入っていた。先に瞳がドアを開けた。中は真っ暗で何も見えなかった。美保に背中を押された。よろけるようにして数歩歩いた。ドアが閉められ、鍵がかけられる音を聞いた。瞳は暗闇の中に、数人の気配を感じていた。忍び笑いを聞いた。

「美保さん。どうしたんですか？電気をつけて下さい」

「るせえんだよ！」

バチツという鞭を打つような音を聞いた。声に聞き覚えがあった。四人部屋で最年長の明菜と思われた。

「これから、ここの決まりを教えてやるよ」

「……」

「着ている服を脱いで素っ裸におなり。早くしないか！」

再び鋭い鞭の音が室内に響いた。不意に背後から抱きしめられ、両乳房を強く揉まれた。

「最高のオツパイだよ！」

先ほどとは違う声が、背後から聞こえてきた。別の手が、ミニスカートの掛けられ、一気に引き摺り下ろされた。パンティも下ろされ、足首から引き抜かれた。

今度は前から、剥き出しにされた股間に何かを押し付けられた。それは生暖かく柔らかい物だった。舌だ！それは強引に膣口をこじ開け、中に入ってきた。揉まれていた乳房が解放されたが、今度はアヌスに熱い舌を感じ



た。

瞳はベッドに横たえられた。照明がつけられ、この部屋の女達が興味深げに瞳の裸体を見詰めていた。

「いい身体しているね。惚れ惚れするよ」

明菜が舌なめずりをするように言った。それを合図に何本もの手が瞳の裸体を這いまわった。太腿を押し広げられ、膣を剥き出しにされた。

「きれいじゃん！」

「あんまり使っていないようだね」

周りの女達が、舐めるような視線を向けていた。

「いただきまーす」

明菜が、顔を股間に押し付けてきた。暖かい舌が膣に差し込まれた。

「うっ……。もう止めて！」

瞳は嗚咽を漏らしていた。同性との性的経験は皆無であつた。瞳の両手を押さえていた女達もきれいなピンク色をした乳首に吸い付いてきた。明菜が、舌先を微妙に震わせ、クリトリスを刺激してきた。寝ても崩れない形の良い乳房を揉まれながら、乳首を舌先で転がされた。うつ伏せに寝かされ、尻の膨らみを驚掴みにされ、存分にアヌスを舐められた。

「この娘。感じているよ！」

明菜が嬉しそうな声を上げた。同性による壺を得た執拗な愛撫にいつしか、暗い欲情が身体の芯から湧きあがってきていた。知らぬ間に、自分から明菜の顔にアヌスを擦り付けていた。

「真弓、掘り出し物だよ」

瞳を連れた明菜が、部屋のドアを開けた。中では、寮生の女達が煙草や酒を飲みながら麻雀を打っていた。煙草の煙で息苦しいほどであった。

「よう。明菜。掘り出し物って？」

明菜は皆に見えるように、瞳を前に押し出した。

「新人の瞳だよ。どう美人でしょう。おっぱいも大きいし」

女達は麻雀を中断し、瞳の全身を舐め回す様に視線を注いだ。

「休憩しよう」

明菜に真弓と呼ばれ、その部屋のリーダー核と思われる女が、立ち上がった。瞳の前に立ち、Tシャツの上から、

豊かな乳房を驚掴みにした。

「大きいね。それに凄く柔らかい」

頬を赤く染め、俯いている瞳の顎に指先を当て、上を向かせた。

「きれいな顔をしているね。特に目が美しい。女の私から見ても濡れてきちやうよ」

瞳の目を濡れた視線で見つめながら、抱きつきミニスカートの中に手を入れてきた。パンティの上から、両手で豊かな尻を撫で回した。

「あんた結構大きいね。百七十センチぐらいあるでしょう。その上、これだけグラマーだと男はほっておかないわね」

言い終わるや否や、瞳の口に吸い付いてきた。強引に

舌で口蓋をこじ開け、舌を入れてきた。口の中を舐め回し、舌を吸出ししやぶられた。唾液を啜り取られた。瞳の大きな目から、一粒の涙が零れ落ちた。真弓は、暫くの間、ディープキスを楽しんだ後に、無言で瞳のミニスカートを脱がし始めた。瞳が、顔を強張らせて、真弓の腕を掴んだ。

「あんた達も黙って見ていないで手伝ってよ！」

真弓が言うと、女達は一斉に動き出した。一人が瞳の背後から羽交い絞めにすると、真弓がミニスカートを引き摺り下ろした。パンティの上から、指先で膣を揉んで感触を楽しんだ後、舐めるようにゆっくりとパンティを尻から抜き取った。

「見て、見て。きれいな尻よ」

「オマ＊コだって、きれいなピンク色しているわよ」

女達が、下半身を剥き出しにされて、嗚咽に咽び泣く瞳の前後で、立ち膝を付いて覗き込んでいた。何本もの手が臆やアヌスを這い回った。

「次はオツパイだよ」

乱暴にTシャツを脱がされ、ブラジャーを筆り取られた。木目細やかで白く柔らかな乳房が零れ落ちた。

「こんなきれいなオツパイ見たこと無いわ！」

「顔を埋めてみたい！」

女達が一斉に歓声を上げた。真弓が素っ裸に剥いた瞳を、麻雀卓の上に座らせた。大きく白い尻が麻雀パイを踏みつけにした。

「ストリップは五百円だったよね」

真弓は、俯いて嗚咽をあげる瞳の重たげな乳房を驚掴みにしながら尋ねた。

「はい。それと本番は千円です。前金で頂きます」

「相変わらず、商売上手だね」

麻雀卓の上に仰向けに横たわる瞳の太腿を大きく押し広げ、衣服を着た真弓が、ピチャピチャと嫌らしい音を立てながら膣やクリトリスを舐めていた。周りで見ていた女達も瞳の乳房を指や舌で弄んだ。堪らなくなっただけ慰をする者もいた。今度はうつ伏せにして、剥き卵のような白い尻を舐め始めた。



瞳は嗚咽を漏らしながらも、為すがままだ。真弓は、暫くの間、無心にアヌスを舐めていた。瞳の泣き声が次第に喘ぎ声へとかわっていった。真弓が立ち上がり、着ていた服をすべて脱ぎ捨て全裸になった。贅肉の無い瑞々しい裸体が現れた。乳房はBカップぐらいであまり大きくはないが、きれいな形をしていた。タンスの引き出しから、極太のペニスバンドを取り出して身に着けた。ベッドの上で、ぐったりとして動かない瞳の背後から覆い被さっていった。

膣に根元まで一気に押し込んだ。仰け反り鋭い喘ぎ声をあげる瞳の豊満な乳房を揉みながら、妖しく尻を前後に動かした。周りで見ていた女達も堪らなくなったのか、衣服を脱ぎ捨て抱き合い、膣やアヌスを弄りあった。瞳

は、その部屋でしたい放題に犯された後、次の部屋に連れ込まれ、寮生達に同様な陵辱を受けた。

入寮したその日は、結局翌朝まで女達に騷り者にされた。翌朝、寮生のベッドで両側から二人の女に抱かれた状態で目覚めた。明菜がやってきて、瞳は全裸のまま連れ出された。その足で、浴室に連れて行かれた。誰もいない筈の浴室には、明菜の中間達が待ち構えていた。明菜が、瞳の黒髪を引き摺るようにして、湯がはられた浴槽に頭から落とし込んだ。浮き上がろうとしたところを、明菜達が上から押さえつけた。大量の水を飲み込み、意識が薄れ掛けたころ、浴槽から引き摺り出された。タイルを敷いた床に、仰向けの姿勢で寝かされた。両手両足を押さえつけられた。両足を大きく広げられ、膺を剥き

出しにされた。

ボディシャンプーがついた手で、股間を触られた。陰毛を扱かれ泡塗れにされた。明菜が、安全カミソリで、陰毛を剃り始めた。

「止めて！何するの！」

「きれいにしなけりやね。いっぱい稼いでもらうんだよ。

おっと。あんまり動くとクリちゃんを切っちゃうよ」

大人しくなった瞳の乳房や尻を女達は愉しげに撫で回した。剃毛が終わると、部屋に連れ込まれ、女達にした
い放題に舐られた。

第二章 肉奴隷

「瞳。あなたにも新人を紹介してあげるよ」

美保が部屋に入るなりそう言った。瞳は、全裸でベッドに横たわっていた。先ほどまで寮生に、張形で犯されていたのだ。サイドテーブルには丸められた千円札が、置かれていた。瞳は、疲れ切った表情で、美保の顔を見上げた。

「本当に可愛い顔しているね。女のあたしから見ても凄くセクシーだよ」

言い終わるなり、瞳に抱きついて唇を奪った。舌を吸い出して貪るように舐めた。うつ伏せにして盛り上がった尻の深い割れ目に顔を入れて、アヌスをガツガツといった感じで舐めた。瞳は為すがまま、身をまかせていた。

アヌスに満足したのか、今度は仰向けにして、太腿を押し広げ顔を押し付けた。激しい勢いで、クリトリスや膣を舐め回した。同性による執拗な愛撫に瞳は次第に感じ始めていた。身体の芯から湧き上がる疼きを抑える事ができなかった。美保の髪を両手で鷲掴みにして、背筋を仰け反らせ喘いでいた。美保の顔に股間をなすり付けるようにして。淫らに腰を動かし始めた。

「い……逝きそう！」

「いいよ。逝きな。あたしの舌でいかせてあげるよ」

美保が瞳の愛液で濡れた顔を上げた。

「はあん。もつと……。目茶目茶にして！」

鋭い喘ぎ声とともに大きく背筋を仰け反らせ、次の瞬間ぐったりとベッドに横たわった。その後暫くの間、二

人はベッドに折り重なるようにして余韻を楽しんでいた。
「そろそろ。行くよ」

美保が瞳をベッドから立ち上がらせた。瞳を全裸姿のまま、廊下に連れ出した。廊下を歩いていた寮生達が、瞳に好奇の目を向けた。

「今晚。瞳を部屋に來させて」

「いいよ。何人で抱くの？」

「四人だったかな」

「じゃあ。四千円前金で頂くわ」

美保とその寮生は、愉しげに商談をしていた。商品は瞳の肉体だ。

「濡れているじゃない。犯ってきたの？」

他の寮生が、瞳の膺に指先を忍び込ませた。瞳は逆ら

わず、俯いて頬を紅潮させていた。

「我慢できない。美保。いいでしょう？」

「仕方がない。サービスしとくよ」

寮生は待っていましたとばかりに、瞳の両手を壁に付かせ、前屈みにさせた。沁み一つ無い豊かな尻が皆の視線を釘付けにした。その寮生は、瞳の後ろで膝立ちになって、深い尻の割れ目に顔を入れ、貪るようにアヌスを舐めた。

「そろそろ。お仕舞いだよ。後で部屋に連れて行くから、続きはそこでするんだね」

美保は、寮生を瞳から引き剥がし、瞳の手を引いてその場を後にした。美保は近くのドアを開けた。白いものが視線に飛び込んできた。部屋の中央に置かれたテーブル

ルに若い女が全裸で四つん這いになっていた。女は二十歳ぐらいで、モデルのように美しい容姿をしていた。可愛い顔は涙で濡れていた。女の横には、グロテスクな形をした張形が転がっていた。女の背後には椅子に座った明菜が、女のアヌスを覗き込んでいた。

「いいところに来たね。これから直腸検査をするところだよ」

明菜は、右手に極薄の手術用手袋を嵌めながら、美保に言った。

「そのようね。楽しみだな」

美保は、瞳の手を引いて、明菜が座っている席の横に座った。瞳を膝の上うつ伏せに横たえた。瞳のアヌスを指先で弄びながら、女の尻を覗いた。

「瞳。新人の由梨だよ。といっても二浪しているから、お前と同じ年だけど。お前に負けず劣らずの美女ときて
いる」

明菜が美保にアヌスを触られている瞳にウインクを投げかけた。

「そろそろ始めるよ」

明菜の手が動いた。片手で尻を押し開き、片手の指先でアヌスを拡張し、ペンシルライトで中を照らし出した。

「本当にきれいなケツときている」

「毛も無いし、きれいなピンク色だね」

女達が感心したように呟いた。

「締まり具合はどうかね」

ビニール手袋を嵌めた手を割れ目に押し込み、人差し

指をアヌスにのめり込ませていった。

「止めて！」

由梨は背筋を仰け反らせるようにして泣き叫んだ。

「こっちは処女のようなだね」

「そんなに締め付けるの？」

「ああ。最高だよ。私が男だったら、一発で昇天ものだね」

明菜は満面の笑みを浮かべ、人差し指をリズムカルに前後に動かした。

「瞳のだって、締め付けるわよ」

美保も瞳のアヌスに指先を入れて掻き回していた。三十分後、瞳と由梨はベッドの上で抱き合っていた。

「瞳。もっと気を入れて、由梨のオマ＊コを舐めるんだ

よ」

ベッドサイドでは、明菜と美保が椅子に座って、缶ビールを飲みながら、その様子を眺めていた。二人はシックスナインの体勢を取らされていた。由梨の指先が瞳のアヌスを犯していた。瞳の可愛い舌が動く度に、由梨は切なげな喘ぎ声を漏らした。

「こいつは売り物になるね」

明菜が興奮した面持ちで美保に話し掛けた。

「いけるよ。美女同士のレズショーなんて最高じゃん」

「入場料を取らなきゃね」

「大儲け間違いないよ」

由梨は、その日何度も寮生達によって犯された。深夜近く、火照った身体を冷やそうとシャワーを浴びること

にした。浴室は消灯されており、誰もいなかった。湯がまだ残っていた。手を入れてみると、温くはあるが、入れないという程の温度ではなかった。取りあえずは、シャワーを浴びることにした。

蛇口を捻ると、冷水が勢いよく噴出した。すぐに適温まで温度が上がった。

ボディシャンプーを使って身体の隅々まで洗い終え、浴槽の湯に浸かることにした。三十八度ほどの湯に長々と入っていた。あがろうとした時、ドアが勢いよく開けられた。

「由梨。何なの？こんな夜中に！お風呂は十一時までと決まっているでしょう！」

戸口には、明菜と、同室の女達が立っていた。皆、何

かを期待しているのか、満面に笑みを浮かべていた。

「御免なさい。知らなかったんです」

「いいから、上がっておいで。寮長には内緒にしてやるから」

由梨は両手で、乳房と股間を隠しながら、浴槽から上がった。

「恥ずかしがることないでしょうに。あなたの身体は隅々まで知っているよ」

明菜が近寄ってきて、由梨の肩を強く押した。美保が背後から抱きついてきた。足をすくわれて、タイルの床に軽く尻餅を突いた。

「何をするの！お願い。乱暴にしないで」

「私ね。前からやってみたかったことがあるんだ」

明菜は、由梨の言葉を見無視し、むっちらりとして形のいい太腿を押し広げた。

「ここに拳を入れてみたかったんだ。フィストファックっていうやつよ」

由梨の股間に右拳を押し付けて、ぐいぐいとこねくり回した。美保によって背後から押さえ付けられているので、逃れることはできなかった。明菜は冷たい笑みを浮かべながら、指を一本、二本と中に入れてきた。

「凄い！締め付けるわよ」

明菜が興奮した面持ちで言った。

「い……痛い！許して」

由梨は黒髪を振り乱して、泣き叫んだ。明菜が額に汗を浮かべながら、肩に力を入れた。

「嫌！」

由梨が、絶叫をあげながら、全身を仰け反らせた。明菜の手が、手首まで膺にのめり込んでいた。由梨は失神していた。人形のように横たわる由梨の膺に右拳を出し入れした。拳が出し入れされる度、愛液と尿が交じった体液が迸り、浴室内にクチュクチュと卑猥な音が響いた。

「私にもやらせてよ」

「いいよ。楽しみな」

美保が、明菜に代わり、フィストファックを始めた。

女達の視線が、出し入れされる拳と、極限まで広げられた膺に集中していた。ひととおり交代して楽しんだ後で、明菜と美保が由梨を両脇から抱えるようにして浴室を出た。

「これから部屋で楽しまない？」

明菜が美保を誘った。

「バイブで？」

美保が、意識が朦朧としている由梨の頭越しに、微笑

んだ

「何でもありよ」

明菜が美保に笑顔を返した。

「でもここ緩々じゃない？」

美保が、由梨の膺に指を出し入れしながら言った。

「お尻の穴があるじゃん」

明菜が、由梨の盛り上がった白い尻を撫で回した。

